様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１２６０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３３４

研究課題名（和文）ウィリアム・バトラー・イェイツの後期舞踏劇における表象の展開に関する研究

研究課題名（英文）Studies on the symbolic structure of the later dance plays of William Butler Yeats

研究代表者
佐藤　容子（SATO, Yoko）

東京農工大学・工学（系）研究科（研究院）・教授

研究者番号：３０１６２４９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：アイルランドの詩人・劇作家・神秘家であるW. B. イェイツの後期舞踏劇における表象構造の展開を、アイルランドのフォークロア及び日本の能狂言との関わりから分析した。『三月の満月』では、「切断された首」の表象と能の謡に通じる楽師たちの声の使い方について考察した。『復活』については、キリスト教の新作能、新作狂言との比較を行い、『復活』が能より狂言の形式に近づき、この劇作における「笑い」がダイモーンの出現という奇跡と結びついているとした。
イェイツと能狂言の発展研究として、狂言「不聞座頭」をフェノロサが英訳した原稿の分析を行い、またイェイツの『自伝』における記述法について能の技法の観点から考察した。

研究成果の概要（英文）：The symbolic structure of the later dance plays of the Irish poet, playwright and visionary, W. B.Yeats is analyzed from the perspectives of Irish folklore and the idea of the Japanese Noh and Kyogen. A Full Moon in March is discussed with an emphasis on its unifying image, “a severed head” accompanied by choric voices of the Musicians. The Resurrection is examined in comparison with new Noh and Kyogen plays with Christian themes. Yeats’s flexible use of the Noh model in The Resurrection makes the play closer to Kyogen style, and an element of “laughter” in the play is closely connected with the miraculous appearance of the “daimon” at the end of the play.
In addition to the analysis of the later dance plays, as an important part of the research on Yeats and the Noh and Kyogen, Fenollosa’s manuscript of a translation of a Kyogen play, “Kikazu Zato” is transcribed and examined. Furthermore, Yeats’s first autobiography is analyzed from the perspective of Noh techniques.

研究分野：英語圏文学

キーワード：W. B. イェイツ　能　狂言　フォークロア　スピリチュアリズム　サウンド・シンボリズム　アイルランド演劇

## １．研究開始当初の背景

本研究は、ウィリアム・バトラー・イェイツ（William Butler Yeats）の舞踏劇の展開に関する一連の研究の一部をなすものである。

平成 17-18 年度に科学研究費補助金の交付を受けた基盤研究（C）では、日本の「能」の形式に直接倣ったイェイツの舞踏劇四編のうち二編『エマーの唯一度の嫉妬』(*The Only Jealousy of Emer*, 1919)、『カルヴァリーの丘』（*Calvary*, 1920）を分析するとともに、晩年の劇作であるジョナサン・スウィフト(Jonathan Swift)をめぐる降霊会を劇化した『窓ガラスに刻まれた言葉』を取り上げた。平成 20-23 年度に科学研究費補助金の交付を受けた基盤研究（C）では、他の二編の舞踏劇『鷹の泉』(*At the Hawk's Well*, 1917 )、『骨の夢』(*The Dreaming of the Bones*, 1919)の分析を行い、晩年の劇作では『煉獄』(*Purgatory*, 1939)を選び、イェイツが「能」に触発されて編み出した形式に自身の世界観を融合させながら、能で舞台化される和解や昇華よりもむしろ、英雄的ジレンマに焦点をあて詩劇の表象構造を深化させていく過程を明らかにしてきた。さらに平成 23-25 年度に科学研究費補助金の交付を受けた基盤研究（C）では、イェイツの英雄劇を締めくくる『クフーリンの死』(*The Death of Cuchulain*, 1939)について考察するとともに、日本の「狂言」を模したとイェイツが述べている『猫と月』(*The Cat and the Moon*, 1926)を分析した。『猫と月』は、悲劇の緊張を解く幕間劇として構想されたもので、軽妙な宗教劇という側面も持っていた。

本研究においては、以上の、イェイツの舞踏劇を中心とした一連の考察を踏まえ、これまでイェイツが日本の「能」を直接的に模して創造した舞踏劇に比して、本格的に論じられることがあまりなかった後期舞踏劇に焦点をあて、その重要性について考察する。特に『三月の満月』(*A Full Moon in March*, 1935)、『大時計塔の王』(*The King of the Great Clock Tower*, 1935)、『復活』(*The Resurrection*, 1931)を取り上げてその表象構造の展開を分析する。それにより、イェイツが、後期の創作活動においては、アイルランドのフォークロアや西欧の神話世界に依りつつも「能狂言」の形式を自在に変奏しながら、イェイツ的「顕現」の瞬間を、より挑戦的なイメージを駆使して劇化するさまを浮き彫りにする。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、アイルランドの詩人・劇作家・神秘家であるウィリアム・バトラー・イェイツの後期舞踏劇における表象の展開を明らかにすることである。イェイツは、日本の「能」及び「狂言」との接触によって、詩の語りの力、音楽、舞踏の三要素で構成される反リアリズムの演劇形式を編み出すが、イェイツの詩劇が、後期の創作活動において、いかに祭儀的様相を強め、独自の演劇形式に昇華されていったかを考察する。表象構造の分析にあたっては、イェイツが体系的に用いている「サウンド・シンボリズム」や、イェイツのなかで「スピリチュアリズム」と溶け合ったアイルランドの「フォークロア」にも注目しながら、日本の能狂言の世界観が、どのようにイェイツ演劇の構造のなかに組み込まれて新たな装いのもとに変奏されるかを明らかにする。

## ３．研究の方法

イェイツの後期舞踏劇の研究方法としては、新しく編纂されたイェイツのテクスト及び刊行されている限りのマニュスクリプト版に基づきながら、綿密なテクスト分析を行うことが基本となる。同時に、イェイツの手紙及び伝記、また妻ジョージとの交霊記録をも参照する。また、「切断された身体」をめぐるアイルランドのフォークロア、ディオニソス神話、聖書のフォークロア及びスピリチュアリズムとの繋がりと影響についても光をあてることとする。さらに日本の「能」及び「狂言」の技法や構造との比較分析を行う。

平成 27 年度には、『三月の満月』の先駆形ともいえる『大時計塔の王』にも触れながら、『三月の満月』の「能」的な技法について分析する。『三月の満月』は、「切断された身体」が霊的な存在と結合して復活する劇である。平成 28 年度～平成 29 年度には、独自の視点でキリストの復活を劇化している『復活』を「能狂言」の視点から分析する。

ところで、イェイツ劇の大きな特徴は、鍵になる台詞や行為が相反する二重の意味合いを帯びるその詩的言語の表象性にある。イェイツは、彼のいう「始原性の力」と「対抗性の力」の間に生じる葛藤のなかに、人生、歴史、世界のありようを表出するが、それは体系的なサウンド・シンボリズムによっても変奏されて重層的な世界を形作っている。この従来の研究では指摘されてこなかったイェイツの技巧は、濃淡はあれど、彼の詩及び劇作に広くみられるものである。彼の象徴体系では、「対抗性の力」は/b/音によって表象され、「始原性の力」は/f/音によって表象される。/b/音は、天上的な価値を志向しながらも地上性を離れることのないイェイツ的英雄の根源的な姿を表す「肉体」“body”に通じる音であり、/f/音は、キリストを表す “fish”に通じ、救済を希求する「魂」と関わるものである。この二音に表象される語群は、対立しながら捻じれていき、時に融合しながら両義性を帯びて、葛藤そのものを表象していく。このような頭韻技法が、イェイツの劇作の構造をどのよう

に支えているかみることは、分析方法の一つとなりうる。

## ４．研究成果

(1)平成27年度には、W.B.イェイツの後期舞踏劇の一つ、『三月の満月』を『大時計の王』も視野にいれながら、主として「能」の影響という観点から分析した。この劇作には、直接的に能を出典とする劇筋はないが、イェイツは、この劇作のなかに、能の謡にも似たコロス的な声の使い方と劇中の心像の統一という点を織り込むことにより、能的要素を独自に消化して祭儀性の高い演劇形式を創出していることを明らかにした。

『三月の満月』の核をなす心像は、「切断された首」を掲げて踊る女王の姿であるが、これは従来、オスカー・ワイルド(Oscar Wilde)の劇作『サロメ』(*Salome*)との関連で論じられてきた。しかし、イェイツ自身が、ワイルドに近づいていることを認めつつも、それとの違いを強調もしていることは看過できない。本研究では、ケルト民族の伝統において「首」が持っていた「魂の座」としての神聖な意味あいに注目し、豚飼いの首（切断された身体）が高貴な女王（霊的な存在）と舞踏により結合して「復活」する表象となることを読み解いた。またケルト民族においては、聖水を頭蓋骨に満たして飲む風習もあったように、「切断された首」が「聖水」と関連しており、相互にその霊力を強め合うとされたことにも注目した。イェイツの前期舞踏劇は、能に触発されて最初に書いた『鷹の泉』も、日本の狂言を模した『猫と月』も、「聖水」をめぐる劇作である。それに対して、後期舞踏劇のイェイツは、その「聖水」の心像を、いわば「聖水」と関連する「切断された首」に転化することによって、生者の世界と霊的世界の橋渡しを行っていると論じた。

一方で、「ワキ」的登場人物たちである従者一と従者二とされる『三月の満月』の楽師たちは、劇の冒頭における歌の選択で劇の基調を自ら決めると共に、劇中の脇役も演ずるほか、「シテ」的登場人物である女王と豚飼いに成り代わって歌うなど、幾重もの役割を担っている点が特徴的である。この劇作では、楽師たちがいわば能の謡にも似て、劇の外と内を自在に出入りすることによって、生者の世界と霊的世界との、邂逅と融合の劇化を果たしていることを示した。

(2) 平成 28 年度～平成 29 年度には、イェイツの後期の劇作『復活』（1934）を、日本の「能狂言」との関わりから探究した。これは、イェイツの『復活』を論じるにあたって、従来のイェイツ研究において、これまで取られてこなかった視点である。イェイツの『復活』は、当初「舞踏劇」として構想されたが、最終的には生身の踊り手は登場せず、舞踏は、登場人物が描写することによって創造される。『復活』では、楽師たちの歌による暗示的・象徴的な枠組みを残しつつも、全体として能をモデルとした演劇形式がゆるやかになり、むしろ狂言の形式に近づいていることを論じた。

イェイツより時代は下るが、日本において昭和の時代には、安土桃山時代にあったと伝えられるキリシタン能の新作が生まれている。そこで、宝生流の『復活のキリスト』（吉田魯洋作詞、宝生九郎作曲、1957）、喜多流の『復活』（土岐善麿作詞、喜多実作曲、1961）、さらに狂言の『復活』（九世三宅藤九郎自作自演、1962）と、イェイツの『復活』との類似点また相違点を分析することを通じて、イェイツの劇作の象徴的劇構造を明らかにした。日本においてキリスト教における「復活」のテーマは、新作能にも新作狂言にも仕立てられ、関連する二つの演劇形式にまたがっていることが注目される。能仕立ての『復活』の場合には、シテまたは後シテによる平安を祈る聖なる舞が華となって舞台を締めくくる。一方、三宅藤九郎の和泉流新作狂言『復活』では、筋立ては新作能と類似しつつも、全体としてそこはかとないユーモアが漂う場面となっている。さらに、新作狂言『十字架』では、十字架の出現と魚たちの舞い踊りの奇跡は、市井の人海六の語りのみによって表出されている。これに対して、イェイツの『復活』では、奇跡の瞬間を、能におけるシテの変身という方法ではなく、むしろ狂言の作法にも似て、観察し驚愕するギリシャ人の語りや、笑い出すシリア人の語りそのものの中に浮かび上がらせているのが特色である。

イェイツの『復活』においては、「笑い」が奇跡の現出に変容していくことが重要である。ヘブライ人、ギリシャ人、シリア人の霊と肉に関する見方の違いが、「笑い」をめぐって次第に明らかになり、想像世界の舞踏のなかでディオニソスの神話とキリストの物語がダイナミックな連続性をもって舞台に表象されていく。それは、イェイツがキリストの復活の装いの中に、霊であり肉である「ダイモーン」の出現を同時に劇化するためであったことを示した。

(3)イェイツの『復活』について分析した際、狂言において重要な「笑い」が、イェイツにとって奇跡の現出と密接な関わりを持っている点に注目することで、イェイツは他の劇作においても、プラトンが批判する笑い――理性の制御を失った状態をむしろ新たな啓示として提示していることが明らかになった。た

とえば、初期の笑劇『緑の兜』（*The Green Helmet*,1910）にみられるホメロス的笑いを称揚する姿勢や、改作を続けた初期の劇作『キャスリーン伯爵夫人』(*The Countess Cathleen,* 1892)で実現できなかった場面としてイェイツが後に思い描いた、変容と啓示の笑いがある。後期の劇作『復活』におけるシリア人の「笑い」もまた、これらに連なるものであり、これまでの批評史のなかで十分に論じられてこなかったイェイツにおける「笑い」というテーマを掘り下げていく可能性を示唆した。

また『復活』が、イェイツに日本刀を贈呈した佐藤醇造に捧げられていることの意味について、霊でもあり肉でもある「ダイモーン」の出現という主題との関連で論じたことは、新しい視点であった。佐藤の刀は、イェイツの詩「自我と魂と対話」(“A Dialogue of Self and Soul”)に言及されていることはよく知られているが、イェイツと妻のジョージが自動筆記などの共同作業を行う際、この刀を魔除けとして儀式のなかに組み入れることがあり、この刀が、ダイモーンの象徴であったことを示唆する記述があるとの指摘がある。とすれば、イェイツの劇作『復活』において、刀を持って舞台上にいるヘブライ人の劇中の立ち位置が重要となろう。劇の前半のメシア論争において、イエスはメシアではなかったとするヘブライ人は現世の幸福を得ることに傾いており、『バーリャの浜辺』(*On Baile's Strand*, 1904)の前半におけるクフーリンの矮小化された姿ともみえるのであるが、劇の最後の場面でキリストの仮面をつけたものが現れたとき、ただ一人何も語らずひざまずき、「ダイモーン」の出現を受け入れているのである。ヘブライ人のこうした側面は、これまでの批評史で看過されてきた点である。

(4)以上の研究成果に加えて、本研究期間中には、W. B.イェイツの劇作と日本の「能狂言」との関わりについて、さらなる調査と考察が進んだ。まず平成23年度～平成25年度に助成を受けた基盤研究(C)でも取り上げた劇作『猫と月』に関して調査が進み、平成27年度にはイェイツが参照したと考えられる日本の狂言「不聞座頭」の英訳草稿との比較対照研究を行うことができた。

イェイツ自身が『猫と月』は日本人が狂言と呼ぶものを意識して書いたと述べ、リチャード・テイラー（Richard Taylor）、アンドルー・パーキン(Andrew Parkin)により、『猫と月』の出典の一つは、日本の狂言「不聞座頭」であることが指摘されながら、これまでイェイツが研究したと考えられるアーネスト・フェノロサ(Earnest Fenollosa)訳の「不聞座頭」の草稿自体について十分な研究がなされてきたとはいえない。「不聞座頭」の英訳草稿は、フェノロサ夫人メアリー・フェノロサ(Mary Fenollosa)がエズラ・パウンド(Ezra Pound)にフェノロサの遺稿として委託した能の英訳草稿のなかに含まれており、現在、イエール大学図書館のエズラ・パウンド・アーカイブに収められている。この英訳草稿のPDFを入手して手書き原稿をタイプし、狂言のどの流派の「不聞座頭」の英訳であるかを調査研究した。その結果、挿入されている二つの謡が大蔵流のものとも和泉流のものとも完全に一致せず、最終的には、江戸時代に一般読者のために出版された『続狂言記』（1700）に掲載されている「つんぼ座頭」の英訳であることをつきとめた。

『続狂言記』にある「つんぼ座頭」の謡の一つは「熊野道者」に関する俗謡であり、聖地と聖なる木のモチーフが含まれていることから、イェイツの『猫と月』との共通点が見出される。もう一つの謡は「宇治の晒」であり水辺の情景が描きだされることから、『猫と月』の中心にある聖なる泉と響きあうものがある。挿入される清新で軽やかな謡と、相互補完的な登場人物たちのなぶりあいの絶妙なバランス感覚こそ、イェイツは狂言から学んだと推察される。

(5)また平成 29 年度においては、イェイツが参照したとされる「不聞座頭」の英訳草稿も踏まえて『猫と月』の劇構造を分析した論文が、アイルランド文学の有力学会誌 Irish University Review に掲載された。「足の悪い乞食」（魂）「目の見えない乞食」（肉体）の双方に幸福な結末が訪れるこの劇作は、イェイツ劇において特異な位置を占めている。魂と肉体の相克は、イェイツの劇においても詩においても重要なテーマであるが、魂の「救済」を拒絶して、地上の生を選択することがイェイツの基本姿勢であった。しかし、イェイツ自身、『猫と月』は他の舞踏劇とはムードが異なっていると認めているように、この劇作では、足は悪いままながら聖者の姿が見え、聖者と連れ立つ「魂」が勝利したかのような印象を与えつつ、聖者の姿が見えずとも視力をさずかった「肉体」にも満足を与えている。このような象徴的劇構造は、イェイツが他の劇作においても一貫して用いているサウンド・シンボリズムによって、支えられていることを明らかにした。すなわち、『猫と月』では、イェイツのサウンド・システムにおいて一義的には対照的に用いられる/b/音と/f/音が共に、「足の悪い乞食」（魂）と「目の見えない乞食」の両者を特徴づけるように用いられることで二者が同根であることが暗示され、このような姿勢は、イェイツの他の劇作とは大きく異なる点であった。

(6)平成 28 年度には、イェイツの劇作に加え、イェイツの『自伝』 の記述法についても考察を行った。イェイツの最初の自伝「幼年時代と青春期についての夢想」（“*Reveries over Childhood and Youth*”）は 1914 年に書かれている。この時期は、イェイツが、エズラ・パウンドを通じてアーネスト・フェノロサの能の英訳に接した直後にあたる。イェイツの「幼年時代と青春期についての夢想」は、類似性を指摘されることもあるジェイムズ・ジョイス（James Joyce）の『若き芸術家の肖像』（*A Portrait of the Artist as a Young Man*）と異なり、「小説」ではなく「自伝」なのであるが、時間感覚や空間感覚が意図的に曖昧化されており、「象徴的な自伝」となっていることが特徴である。「劇作」と「自伝」という異なるジャンルながら、時間と空間を自在に行き来する能から学んだ技法が受け継がれている面があることを指摘した。「幼年時代と青春期についての夢想」の陰鬱な結びが、『鷹の泉』の初稿の結びと類似していることは、リチャード・エルマン（Richard Ellmann）が指摘している。しかしそうした類似にとどまらず、この「自伝」の冒頭の記述法もまた『鷹の泉』と共通する手法が伺える。記憶のなかに呼び起され、並置される断片の連続のような記述が、次第に交差しながら軌跡を描き、父の影響を脱する少年の自立と神秘的かつ民族主義的詩人の誕生が象徴的に描き出されていると論じた。

## ５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

①佐藤　容子「能狂言の視点からみるイェイツの奇跡劇－『復活』の劇構造について,『イェイツ研究』No.48, 2017, 32-49 （査読有）

② Yoko SATO, “Yeats’s ‘Kiogen’: The Symbolic Structure of *The Cat and the Moon*, ” *Irish University Review*, vol.47, No.2, 2017, 298-314.(査読有)

③Yoko SATO, “Yeats’s *Reveries over Childhood and Youth*: A Symbolic Autobiography,” *Journal of Irish Studies*, vol. XXXII, 2017, 23-34.(査読有)

④Yoko SATO, “Yeats’s *A Full Moon in March*: A Unifying Image with Choric Voices,”*Journal of Irish Studies*, vol. XXX1, 2016, 19-30.(査読有)

⑤佐藤　容子「（書評）杉山寿美子著『モード・ゴン　1866-1953－アイルランドのジャンヌ・ダルク』」,『イェイツ研究』, No. 47, 2016, 93-95.

⑥Yoko SATO, “Fenollosa’s Manuscript of *Kikazu Zato*: The Japanese Source of Yeats’s *The Cat and the Moon*,” *Journal of Irish Studies*, vol. XXXI, 2015, 27-38. (査読有)

〔学会発表〕（計　6　件）

①佐藤　容子「イェイツの奇跡劇—『復活』の舞台表象について」, 日本イェイツ協会第 52 回大会, 東海大学, 2016（平成 28 年 10 月 22 日）

② Yoko SATO【招待講演】, “Yeats’s *Reveries over Childhood and Youth*,” Presented in The IASIL Japan 33rd International Conference, International Christian University, Tokyo, October 16, 2016.

③佐藤　容子【招待講演】「W.B. イェイツと能」, 日本アイルランド協会 2015 年度大会」, 同志社大学, 2015（平成 27 年 12 月 5 日)

④Yoko SATO【招待講演】, “W. B. Yeats and the Noh,” Presented in The Inaugural Conference of International Yeats Society, University of Limerick, Ireland, October 16, 2015.

⑤Yoko SATO, “ The Choric Voices: Yeats’s *A Full Moon in March,* The IASIL Conference 2015, University of York, UK, July 23, 2015.

⑥佐藤　容子【招待講演】「イェイツ—能に出会うまで」(Yeats Day in Japan 2015—イェイツ生誕 150 周年記念イベント, アイルランド大使館主催･日本アイルランド協会共催), 2015（平成 27 年 6 月 14 日), シアターＸ(カイ), 東京都墨田区.

〔図書〕（計　2　件）

① 木村正俊・松村賢一編『ケルト文化事典』, 東京堂出版, 2017, 424pp. (佐藤　容子　２項目執筆「レイディ・グレゴリー」, 「アベイ劇場」)

② 木村正俊編『文学都市ダブリン』, 春風社, 2017, 436pp.＋xxii
（佐藤　容子　第７章執筆 「W. B. イェイツ　アイルランド文芸復興運動を牽引—『キャスリーン伯爵夫人』にみる劇場理念の追求」, 147-169 ）

## ６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　容子（SATO, Yoko）

東京農工大学・大学院工学研究院・教授

研究者番号：30162449